

## 【フォーラム】

## 中国語の韻律的手段による「文焦点」標示

相原まり子

東京大学大学院生

**【要旨】** 本稿は、Lambrecht (2000) の理論的枠組みを用い、「述語焦点 (PF)」の文が無標であるという前提のもとに中国語の「文焦点 (SF)」標示について論じる。中国語では、主語の指示対象が聞き手にとって同定可能な場合には、通常、形態統語的な手段による SF 標示はできない。そこで、本研究は、同定可能な主語をもつ PF 文と SF 文を音響分析し、両者を比較した。その結果、主語の持続時間が文全体に占める割合は、声調に関係なく SF 文のほうが大きく、 $F_0$  については、声調にもよるが、SF 文において主語の変化幅の拡大と述語の変化幅の縮小の少なくともどちらか一方が起こるという傾向が見られた。この結果は、中国語において、形態統語的な手段が使えない場合に、主語を韻律的に際立たせることによって SF 標示が実現されるということを裏付けるものであり、「脱主題化の原則」が中国語にも当てはまることを示している\*。

**キーワード:** 情報構造, 焦点, 韻律, 脱主題化, 中国語

## 1. はじめに

情報構造研究の代表的なものに Lambrecht の一連の研究があるが、中でも Lambrecht (2000) は、様々な言語を取り上げながら、文全体が焦点であることがどのように標示されるか、という問題について論じている。同論文は、主語が主題で述語が焦点の文を無標の文と見なし、文全体が焦点であることを標示するには、主語を「脱主題化」する必要があるという仮説を立て<sup>1</sup>、次のように説明している (SF = Sentence Focus, PF = Predicate Focus)。

**脱主題化の原則 (The Principle of Detopicalization)**

SF 標示は、PF 構文の主題を担う主語がもつ韻律的特徴と形態統語的特徴の両方、あるいはどちらかの取り消しを伴う (Lambrecht 2000: 624)。

\* 本稿は、日本言語学会第 132 回大会 (2006 年 6 月、東京大学) での口頭発表に大幅な加筆・修正を加えたものである。本稿の執筆にあたり、楊凱榮先生、ラマール・クリスティーン先生、矢田部修一先生、広瀬友紀先生、邊姫京先生から指導、助言をいただき、さらに、査読者の先生方から多くの有益なコメントをいただいた。また、口頭発表の際にも多くの方から貴重な意見をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

<sup>1</sup> 同論文は、さらに、主語の脱主題化が通言語的にどのように実現されるかという視点から「SF 構文における主語は、対応する PF 構文における焦点内目的語 (focal object) がもつ韻律的特徴と形態統語的特徴の両方あるいはどちらかで文法的に符号化される傾向がある」という「主語-目的語中和の原則」を提案し、この仮説を支持するデータを数多く挙げている。しかし、その一方で「この主張は強すぎるかもしれない」とも述べ、当てはまらない例があることも指摘している (Lambrecht 2000: 626)。

Lambrecht (1994: 138, 2000: 654) は中国語にも言及し、主語が動詞の後ろに現れる文や“有”構文をSF構文と見なしている(以下の(1)は刘月华他(2001: 727)より、(2)は筆者による作例)。

- (1) 来 客人 了。  
       来る 客 変化  
       「お客さんが来た」
- (2) 有 客人 来 了。  
       いる 客 来る 変化  
       「お客さんが来た」

Lambrecht の情報構造理論では、自動詞述語の項と他動詞述語の二つの項のうちにより動作主的な項を「主語」と呼んでおり、これに従えば(1)(2)の“客人”は“来”の主語と見なせる。中国語のPF構文の主語は動詞の前に置かれることから、(1)では主語を“来”の後ろに置くことによって、(2)では主語の前に存在を表す動詞“有”を付加することによって、PF構文の主語が備える特徴を取り消している。この点に関して、Lambrecht の理論を用いて中国語を分析した LaPolla (1995: 310) は、中国語においては、英語のような言語と違い、SF文はPF文と同じ統語構造にはなり得ず、主題になる可能性のある名詞句が主題と解釈されるのを避けるために、存現構造を使わなければならないと述べている(存現構造は(1)(2)のような文を指す)。しかし、ここで問題となるのは、主語の指示対象が聞き手にとって同定可能な場合である。なぜなら、中国語では主語の指示対象が同定可能な場合には、特殊な場合を除き<sup>2</sup>、(3)のように「主語-述語」の語順にしなければならず、(1)(2)のような構文は使えないからである。

- (3) 小李 来 了。  
       李さん 来る 変化  
       「李さんが来た」

それでは、主語の指示対象が同定可能な場合、中国語にはSFであることを標示する手段はないのであろうか?—筆者の観察によれば、SF文の主語はPF文の主語よりも文全体の中での際立ちが大きいという聴覚的な印象があるが、先行研究ではこのような指摘はなく、このことを裏付ける音響的特徴も明らかにされていない。そこで、本稿はSF文とPF文を音響的な面から比較することを試みた。

## 2. 用語の定義

本稿は、Lambrecht (1994: 131, 213) の定義に従い、「焦点」と「主題」をそれぞれ次のような意味で用いる。

<sup>2</sup> 小説などには、同定可能な指示対象をもつ主語が動詞の後ろに来ている例も見られるが、通常の会話では動詞の前に現れ、“来小李了”“来了小李”“有小李来了”などと言うことはできない。

**焦点**：語用論的に組み立てられた命題の意味要素であり、断言を前提<sup>3</sup>と違わせている要素

**主題**：ある指示対象がある命題の主題と解釈されるのは、所与の状況においてその命題がその指示対象についての聞き手の知識を増やす情報を表していると解釈される場合である

簡単に言えば、焦点はその発話によって伝えられる情報から聞き手が既に知っている（と話し手が想定している）情報を除いた部分であり、主題は新しい情報が付け加えられるその対象である。本稿では、主語が主題で述語が焦点であると解釈できる文を PF 文、文全体が焦点であると解釈できる文を SF 文と呼ぶ。

### 3. 先行研究

中国語の韻律研究において、中立文を扱った文献は比較的多く見られるが、先行研究の中立文は何れも本稿の取り上げる SF 文とは異なる。例えば、楊立明（1993）は項が焦点の文と中立文を考察対象としているが、同論文の中立文は文脈が提示されない状況において音読された文を指す（楊立明（1993: 2））。文脈が提示されない場合、被験者は自由に文脈を想定できるため、SF 文になるとは限らない。Xu（1999）は、一つの項や動詞のみに焦点が置かれる文と中立焦点文との比較を行っているが、Xu の言う中立焦点文は、述語部分を尋ねる疑問文に対する返答として発せられた文を指すことから（Xu 1999: 60）、本稿の枠組みで言えば、PF 文に相当する。また、馮勝利（2000: 59）は、特殊な言語環境の妨げがない状況における文強勢を普通強勢と呼び、次の（4）について、B は文全体が焦点なので普通強勢が文末の“盘子”に置かれると述べているが、B の主語“我”は既に話題に上っており、述語“摔了一个盘子”は“我”に対する解説と解釈できることから、B は PF 文だと考えられる。

- (4) A: 你 哭 什么, 怎么 回 事?  
 あなた 泣く 何 なぜ 回 こと  
 「あなた、何を泣いているの、どうしたの？」
- B: 我 摔 了 一 个 盘 子。  
 私 落とす 完了 一 個 皿  
 「皿を落として割ってしまったの」

このように、従来の中国語の韻律研究では、SF 文と PF 文の違いにはほとんど注意が払われてこなかったが、中国語における情報構造と韻律の関係を解明するためには、SF 文と PF 文の韻律的違いを明らかにするという作業は避けて通れない重要な課題の一つだと考えられ、本研究はその第一段階として位置づけることができる。

<sup>3</sup>「前提」と「断言」はそれぞれ「語用論的前提」と「語用論的断言」を指し、語用論的前提は「発話の時点で、聞き手が既に知っている又は当然であると見なす準備ができて」と話し手によって想定される命題の集合で、語彙・文法的に喚起されるもの、語用論的断言は「聞き手がその文を聞いた結果、知る又は当然と見なすと期待されている、その文によって表わされる命題」と定義される（Lambrecht 1994: 52）。

#### 4. 研究の目的と方法

本研究の目的は、中国語（共通語）における SF 文と PF 文の違いを音響的な面から明らかにし、形態統語的に SF 標示ができない場合、韻律的な手段が用いられるということを示すことである。研究の方法は、条件を統制した対話文を中国語母語話者に音読してもらい、その音声を音響分析するという方法を使った。実験の内容については、以下の第5節で詳しく述べる。

#### 5. 実験内容

主語の指示対象が聞き手にとって同定可能であるような「主語－述語」構造の文を作り、その文が PF となるような文脈と SF となるような文脈を設定した。以下の (5) と (6) は、実際に被験者に提示した対話文と状況説明である。(5) の B の発話は PF 文、(6) の B の発話は SF 文になると考えられる。

- (5) 情况：A 觉得张菲会来，但是她没来，A 问 B。  
 (状況：A は張菲が来ると思っていたが、来ていないので、B に質問した。)  
 A：张菲 呢？  
     張菲 は  
     「張菲は？」  
 B：张菲 病 了。  
     張菲 病む 変化  
     「張菲は病気になったの」
- (6) 情况：A 看见 B 无精打采的样子，感到很奇怪，A 问 B。  
 (状況：A は B が落ち込んでいる様子を見て、変だなと思い、B に質問した。)  
 A：怎么 了？  
     どう 変化  
     「どうしたの？」  
 B：张菲 病 了。  
     張菲 病む 変化  
     「張菲が病気になったの」

分析対象である B の発話は、声調の組み合わせを考慮し、全部で 20 種類用意した。可能な声調の組み合わせを全て網羅した実験を行うことが理想であったが、被験者への負担を考慮し、述語は変えず、主語についてのみ全ての声調の組み合わせを網羅するようにした<sup>4</sup>。述語には、非動作主的な主語を伴う無意志自動詞を選んだ<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 中国語（共通語）には、本来の声調を失った軽声があるが、二音節から成る語の第一音節は軽声にならないため、本実験における主語の可能な声調の組み合わせは 20 通り（4（第一音節）× 5（第二音節））となる。但し、第三声＋第三声の場合、前の第三声が第二声に変調するため、実質的には 19 通りである。

<sup>5</sup> Lambrecht (2000: 617) の「例外はあるが、SF 文は自動詞文であり、SF の解釈を許すのは非動作主的な主語 (non-agentive subjects) を伴う自動詞に限られる」という主張を参考にし、

録音は、2008年1月に中国北京語言大学の対外漢語研究中心語音実験室で行い、被験者は中国語母語話者12人である(19～24歳の女性)。録音にはCool Edit Pro 2.1を用い、サンプリング周波数は22050 Hz、量子化ビット数は16 bitに設定した。被験者は二人で一組とし、一人がA役、もう一人がB役になって対話文を読んでもらった。各対話は二回ずつ行うよう指示し、すべて終わったら役を交換し、もう一度各対話を二回ずつ行うよう指示した。

## 6. 分析手順

録音した対話の返答部分を対象とし、Praat (version 4.6.12) (Boersma and Weenink 2007)を用いて音響分析を行い、〈主語の持続時間が文全体の持続時間に占める割合〉と〈主語と述語それぞれの基本周波数( $F_0$ )の変化幅〉について、それぞれPF文とSF文を比較した。音の強さについては分析を行っていないが、これは、楊立明(1993)<sup>6</sup>の分析結果を参考にし、中国語では情報構造と音の強さの関わりはそれほど大きくないと判断したためである。持続時間と $F_0$ の測定方法と分析手順は以下の通りである。

### [持続時間]

次の図1のように主語部分と文全体の持続時間をそれぞれ測定し<sup>7</sup>、〈主語の持続時間が文全体の持続時間に占める割合〉を求めた。

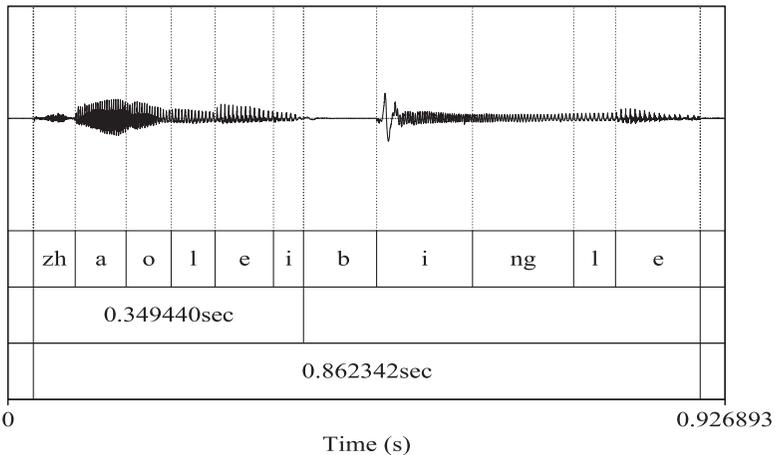


図1 音声波形と持続時間

非動作主的な主語を伴う自動詞文を実験文に選んだ。本稿は暫定的にこの主張に沿って議論を進めるが、「SF文＝主語が非動作主的」という考え方の妥当性については検証が必要である。  
<sup>6</sup> 楊立明(1993: 1)は「音の強さは「語法重音」にとっても「邏輯重音」にとっても決定的な要因とはならない」と述べている(語法重音は中立文の強勢を指し、邏輯重音はある項が焦点となっている場合にその項に置かれる強勢を指す)。

<sup>7</sup> 図1と図2は同じ音声の波形と $F_0$ 曲線であり、PF文のデータである。

同一話者が同一文脈において発した音声は二つずつあるため、その二つの音声からそれぞれ算出した主語の持続時間の割合を平均し、PF文とSF文でその値に違いがあるかどうかを調べた。

### [基本周波数 (F<sub>0</sub>)]

主語、述語について、図2のようにF<sub>0</sub>の最高値と最低値を測定し、変化幅を求めた。阻害音と文頭の共鳴音のF<sub>0</sub>曲線は算出された場合でも歪んでいることが多かったため<sup>8</sup>、母音と文中の共鳴音の部分のみを測定対象とした。

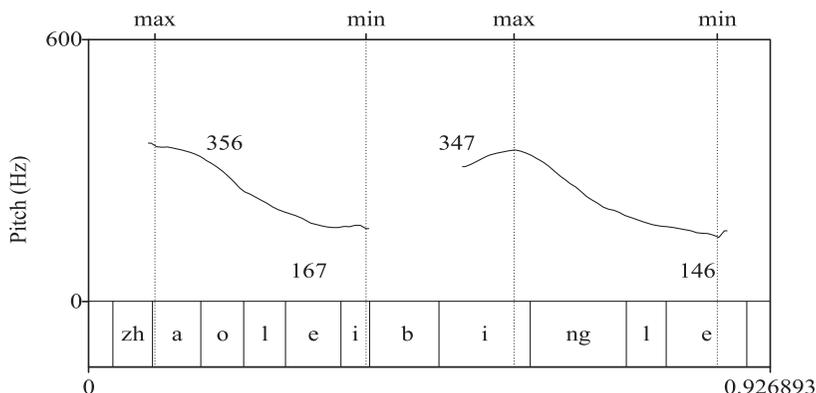


図2 F<sub>0</sub>曲線

変化幅は、以下の計算式を用いて (t Hart, Collier and Cohen 1990: 24), セミトーンスケール (semitone scale) に変換して算出した<sup>9</sup>。

$$D = 12 \cdot \log_2 \frac{f_1}{f_2} = \frac{12}{\log_{10} 2} \cdot \log_{10} \frac{f_1}{f_2}$$

持続時間の場合と同様に、同一話者による二回分の音声からそれぞれ算出した変化幅の平均値を求め、PFとSFでその値に変化があるかどうかを調べた。

## 7. 分析結果

まず、持続時間の分析結果から見ていきたい。表1のPFとSFの各列に示した値は、〈主語の持続時間が全体の持続時間に占める割合〉の全被験者の平均値であり、一番右の列の値はt検定 (Paired t-test) の結果である。表1が示すように、20種類

<sup>8</sup> F<sub>0</sub>曲線の歪みに対する処理については、朝鮮語ソウル方言の韻律について論じている宇都木 (2005) の考え方を参考にした。宇都木 (2005: 185) は、F<sub>0</sub>曲線の観察において、母音と共鳴音の部分だけが描き出されるようにし、また、共鳴音でも、[r]の部分、発話初頭の鼻音の部分、破裂音やポーズの直後の鼻音の部分は、F<sub>0</sub>曲線が歪むことから、F<sub>0</sub>曲線を描かせていない。

<sup>9</sup> 査読者から指摘をいただき、対数尺を採用した。

の文すべてにおいてSF文のほうがPF文よりも主語の持続時間の割合が大きく、有意差が認められた ( $p < 0.05$ )。この結果は、声調の組み合わせに関係なく、SF文の主語はPF文の主語と比べて、文全体に対してより長く発音されるということを示している。

表1 主語の持続時間が文全体の持続時間に占める割合

文	PF	SF	$p$ 値 ( $df=11$ )
①張菲病了 Zhāng fēi bìng le	0.425	0.451	0.026
②張梅病了 Zhāng méi bìng le	0.434	0.462	0.021
③張蕾病了 Zhāng lěi bìng le	0.403	0.437	0.008
④張麗病了 Zhāng lì bìng le	0.412	0.451	0.027
⑤陳菲病了 Chén fēi bìng le	0.439	0.467	0.003
⑥陳梅病了 Chén méi bìng le	0.441	0.462	0.005
⑦陳蕾病了 Chén lěi bìng le	0.433	0.460	0.012
⑧陳麗病了 Chén lì bìng le	0.428	0.470	0.009
⑨李菲病了 Lǐ fēi bìng le	0.418	0.450	0.001
⑩李梅病了 Lǐ méi bìng le	0.412	0.445	0.004
⑪李蕾病了 Lǐ lěi bìng le	0.413	0.432	0.027
⑫李麗病了 Lǐ lì bìng le	0.387	0.431	0.003
⑬趙菲病了 Zhào fēi bìng le	0.421	0.443	0.011
⑭趙梅病了 Zhào méi bìng le	0.426	0.449	0.034
⑮趙蕾病了 Zhào lěi bìng le	0.408	0.438	0.013
⑯趙麗病了 Zhào lì bìng le	0.404	0.432	0.025
⑰媽媽病了 Māma bìng le	0.375	0.407	0.003
⑱爺爺病了 Yéye bìng le	0.378	0.415	0.002
⑲姐姐病了 Jiějie bìng le	0.387	0.422	0.005
⑳妹妹病了 Mèimei bìng le	0.381	0.429	0.016

次に、 $F_0$ について見ていく。表2は〈 $F_0$ 変化幅〉の全被験者の平均値と $t$ 検定の結果である(表中の※印は $p < 0.05$ )。表2が示すように、主語の変化幅については、20文のうち14文(②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑨, ⑫, ⑭, ⑯, ⑰, ⑱, ⑳)で有意差があり、すべてSFのほうが大きかった。述語の変化幅については、20文中10文(①, ③, ④, ⑧, ⑨, ⑩, ⑭, ⑰, ⑱, ⑳)で有意差があり、すべてSFのほうが小さかった<sup>10</sup>。主語と述語のどちらにも有意差が見られなかったのは⑪, ⑬, ⑮のみであり、それ以外の17文では、SFにおいて「主語の変化幅の拡大」と

<sup>10</sup> 注4で述べたような変調があるため、⑦と⑪は実質的には同じ声調の組み合わせになっているはずだが、主語の変化幅については異なる結果となった。このような違いが生まれた要因については、新たに実験を行って考察する必要がある。

「述語の変化幅の縮小」の少なくともどちらか一方の現象が見られた<sup>11</sup>。

表2 F<sub>0</sub>の変化幅(単位: semitone)

文	主語の変化幅			述語の変化幅		
	PF	SF	p 値	PF	SF	p 値
①张菲病了 Zhāng fēi bìng le	2.5	2.7	0.162	13.2	11.9	0.036 <sup>**</sup>
②张梅病了 Zhāng méi bìng le	4.6	5.8	0.040 <sup>**</sup>	11.9	11.1	0.260
③张蕾病了 Zhāng lěi bìng le	6.8	8.4	0.040 <sup>**</sup>	11.7	9.7	0.013 <sup>**</sup>
④张丽病了 Zhāng lì bìng le	3.1	4.6	0.037 <sup>**</sup>	12.3	10.0	0.026 <sup>**</sup>
⑤陈菲病了 Chén fēi bìng le	5.0	5.7	0.017 <sup>**</sup>	12.9	12.7	0.833
⑥陈梅病了 Chén méi bìng le	3.2	4.2	0.014 <sup>**</sup>	12.4	11.8	0.484
⑦陈蕾病了 Chén lěi bìng le	4.8	6.1	0.003 <sup>**</sup>	11.3	10.4	0.231
⑧陈丽病了 Chén lì bìng le	4.7	5.3	0.246	13.1	10.4	0.015 <sup>**</sup>
⑨李菲病了 Lǐ fēi bìng le	5.8	6.7	0.048 <sup>**</sup>	13.2	11.7	0.046 <sup>**</sup>
⑩李梅病了 Lǐ méi bìng le	3.8	4.2	0.144	12.8	11.3	0.028 <sup>**</sup>
⑪李蕾病了 Lǐ lěi bìng le	6.2	5.5	0.155	11.9	11.4	0.425
⑫李丽病了 Lǐ lì bìng le	5.0	6.2	0.023 <sup>**</sup>	12.4	10.4	0.108
⑬赵菲病了 Zhào fēi bìng le	3.5	4.0	0.244	12.5	11.7	0.187
⑭赵梅病了 Zhào méi bìng le	5.6	7.0	0.019 <sup>**</sup>	11.9	10.5	0.033 <sup>**</sup>
⑮赵蕾病了 Zhào lěi bìng le	8.0	9.1	0.057	11.6	9.7	0.059
⑯赵丽病了 Zhào lì bìng le	2.9	3.9	0.004 <sup>**</sup>	11.9	10.6	0.140
⑰妈妈病了 Māma bìng le	2.2	4.2	0.008 <sup>**</sup>	11.8	9.0	0.005 <sup>**</sup>
⑱爷爷病了 Yéye bìng le	4.9	6.1	0.037 <sup>**</sup>	12.2	10.1	0.043 <sup>**</sup>
⑲姐姐病了 Jiějie bìng le	4.9	6.2	0.019 <sup>**</sup>	11.4	11.2	0.617
⑳妹妹病了 Mèimei bìng le	4.0	7.0	0.013 <sup>**</sup>	12.0	7.7	0.004 <sup>**</sup>

なお、F<sub>0</sub>の最高値(Hz)についても、主語においてはSF文のほうがPF文よりも高く、述語においては逆にPF文のほうがSF文よりも高いという傾向が見られたが、5%水準の有意差があったのは、主語は3文(⑤, ⑫, ⑳, SF > PF)、述語は7文に止まり(①, ⑩, ⑫, ⑮, ⑰, ⑱, ⑳, PF > SF)、情報構造の違いは最高値よりも変化幅のほうにより顕著に現れるということが示唆された。

以上、持続時間とF<sub>0</sub>それぞれについてPF文とSF文を比較したが、この分析を通して明らかになった両者の音響的な違いは、中国語では、主語を全体に対してより長く発音し、声調の組み合わせによっては、主語のピッチ変化幅を大きくしたり、述語のピッチ変化幅を小さくしたりして主語を韻律的に際立たせ、SF標示を行っているということを示している。

<sup>11</sup> 査読者から指摘をいただいた。

さらに、ここでもう一つ指摘しておきたいのは中国語と英語の共通点である。Lambrecht (1994: 223) は以下のような例を挙げ、韻律的手段による英語の SF 標示について論じている。

- (7) a. What happened to your car?  
 b. My car/It broke DOWN.  
 (8) a. What happened?  
 b. My CAR broke down.

(7b) は PF 構文で、韻律的際立ちは述語の一部である“down”にあり、(8b) は SF 構文で、際立ちは主語の一部である“car”にあるという。したがって、「主語を韻律的に際立たせることによって、その文が SF であることを標示している」という点では、中国語と英語は共通していると言うことができるだろう。但し、「どうやって際立たせるか」という点では違いがあるように思われる。英語の SF 構文(8b)では、“car”にピッチアクセントが置かれるが(Lambrecht 1994: 14)、本研究の実験では、 $F_0$  については有意差が見られない文もあり(持続時間はすべての文で有意差あり)、中国語の SF 標示においてはピッチよりも長さが重要な役割を果たしている可能性がある。これは、中国語が声調言語であることと密接に関係していると考えられ、例えば、以下の図3、図4は同一話者の“赵梅病了Zhào méi bing le”, “爷爷病了Yéye bing le”の $F_0$  曲線であるが(点線: PF, 実線: SF)、これらの比較から、 $F_0$  曲線の形状は使われている語彙の声調によって大きく異なり、情報構造が違って声調の型が保持されるということがわかる。つまり、中国語は、声調があるために、英語よりも情報構造の違いピッチに反映させにくいのではないかと考えられる。

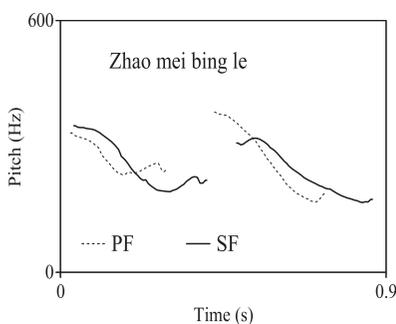


図3 Zhào méi bing le

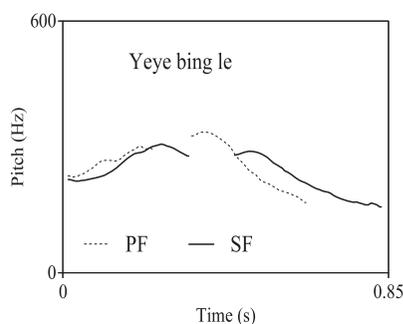


図4 Yéye bing le

## 8. 結論

本稿は Lambrecht (2000) の理論的枠組みを用い、述語焦点文が無標の文であるという前提の下に、中国語の「文焦点」標示について論じた。形態統語的に同一の

形式をもつ述語焦点文 (PF 文) と文焦点文 (SF 文) を音響的な面から比較した結果、〈主語の持続時間が文全体の持続時間に占める割合〉については、声調の組み合わせに関わらず SF 文のほうが PF 文よりも大きかった。〈F<sub>0</sub> の変化幅〉については、声調の組み合わせにもよるが、SF 文において、主語の変化幅の拡大と述語の変化幅の縮小の少なくともどちらか一方が起こるという傾向が見られた。PF 文と SF 文のこのような音響上の違いは、主語を全体に対してより長く発音し、声調の組み合わせによっては、主語のピッチの変化幅を拡大したり、述語のピッチの変化幅を縮小したりして主語を韻律的に際立たせ、SF 標示を行っているということを示している。冒頭で述べたように、中国語では主語の指示対象が聞き手にとって同定可能な場合、通常、「主語を動詞の後ろに置く」「主語の前に“有”を付加する」といった形態統語的な SF 標示はできないが、本研究のこの結果は、形態統語的な手段が使えない場合に韻律的な手段が用いられることを示しており、Lambrecht (2000) が主張する「SF 標示は、PF 構文の主題を担う主語がもつ韻律の特徴と形態統語的特徴の両方、あるいはどちらかの取り消しを伴う」という「脱主題化の原則」が中国語にも当てはまることを証明するものである。また、本研究を通して、中国語と英語の共通点も明らかになった。

以上、本稿の結論を簡単にまとめたが、残された課題も多い。まず、今回の実験に用いた文は、非動作主的な主語 (non-agentive subject) を伴う自動詞文であるが、他動詞文及び動作主的な主語を伴う自動詞文についても実験を行う必要がある。また、本研究の実験結果は、主語を韻律的に際立たせることによって SF 標示が実現されることを示しているが、次の段階として、SF 文と主語のみが焦点になっている文とを比較することも必要だと思われる。さらに、使われている語彙の声調の違いが SF 文の韻律に与える影響についても、データを増やして詳しく分析する必要がある<sup>12</sup>。

## 参 照 文 献

- Boersma, Paul and David Weenink (2007) Praat: Doing Phonetics by Computer (version 4.6.12) [www.praat.org].
- 冯胜利 (2000) 『汉语韵律句法学』上海: 上海教育出版社.
- 't Hart, Johan, René Collier and Antonie Cohen (1990) *A perceptual study of intonation: an experimental-phonetic approach to speech melody*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (2000) When subjects behave like objects: an analysis of the merging of S and O in sentence-focus constructions across languages. *Studies in Language* 24 (3): 611–682.
- LaPolla, Randy J. (1995) Pragmatic Relations and Word Order in Chinese. In: Pamela Downing and Michael Noonan (eds.) *Word Order in Discourse*, 297–329. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 刘月华・潘文娒・故韡 (2001) 『实用现代汉语语法』(增订本) 北京: 商务印书馆.

<sup>12</sup> これらの問題については、査読者からも指摘をいただいたが、現時点では十分なデータが揃っていないため、今後の課題としたい。

- 宇都木昭 (2005) 「朝鮮語ソウル方言におけるアクセント句—音響分析による再検討—」博士論文, 筑波大学.
- Xu, Yi (1999) Effects of tone and focus on the formation and alignment of  $f_0$  contours. *Journal of Phonetics* 27: 55–105.
- 杨立明 (1993) 「语句重音声学特征初探」『中国語学』240: 1–10.

執筆者連絡先 : [受領日 2010年3月16日  
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 最終原稿受理日 2010年10月25日]  
東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻  
xiangyuanzhen@gmail.com

## Abstract

### Prosodic Marking of “Sentence-Focus” in Chinese

MARIKO AIHARA

*Graduate Student, The University of Tokyo*

This paper discusses the marking of Sentence-Focus (SF) in Chinese within the framework of Lambrecht (2000), on the assumption that Predicate-Focus (PF) sentences are unmarked. In Chinese, morphosyntactic means cannot ordinarily be employed for SF marking when the referent of the subject is identifiable to the addressee. This study acoustically analyzed PF and SF sentences with identifiable subjects and compared them. The findings are as follows: (a) the duration of the subject relative to that of the entire sentence is longer in SF sentences than in PF sentences, regardless of the lexical tone; and (b) in most cases, either the  $f_0$  range expansion of the subject or the  $f_0$  range compression of the predicate, or both, occur in SF sentences. These findings indicate that when morphosyntactic means cannot be employed, SF marking is implemented by making the subject constituent prosodically prominent in Chinese, and that the principle of detopicalization—a hypothesis proposed by Lambrecht—holds for this language.